

### (3. 共同研究班活動報告)

#### 3-3. 「フィールドワークの技法を問う」研究班 活動報告

稲津 秀樹・飯塚 諒・ケイン 樹里安

##### 1 研究会の発足主旨

いわゆるフィールドワークに関する知識を得ることは、社会調査論をはじめとした講義を受けるにとどまらず、入門書も数多く刊行されている昨今にあつて、とりわけ難しいことではなくなっている。だが、それらを通じて伝えられる「技法 (art)」を所与のものとすることで不可視化される知識の次元もあるのではないか。M. フーコーの影響を受けた諸研究やポストモダン人類学の反省を示唆するまでもなく、知識と権力の結びつきを指摘しておくことは、フィールドワーク論にも通じることであり、かつそれはフィールドワークであるからこそ、「現場」との緊張関係の下で常に問いなおされ続けていくべき課題であるだろう。一方、フィールドワークやその技法に関する「悩み事」は、(いわゆる量的調査／質的調査を問わずに) フィールドへ赴く大学院生・研究員のあいだで「個別的に対処すべき問題」と思われがちで、なかなか共有される機会も少ないように思われる。また、オフィシャルな学会をはじめ、「それなりの場所」では「完成された調査報告」を求められるために、技法上の位置づけが明確ではない、という理由で削ぎ落とされてしまう事実(データ)や出来事(エピソード)も往々にしてあるだろう。

上の関心を踏まえつつ、今回、私たちは「技法」という観点からフィールドワークという営み自体を問いなおす事を目的とした研究会を設けることにした<sup>1)</sup>。ここでいうフィールドワークとは、実践として行われる当事者研究も含めた広い意味での「現場の知」に関与する方法(科学的知識や倫理的な構えも含む)のことを暫定的に指している。これを考える上で大事にしたいのが、既存議論との対比の下で、学内外の枠を越えた研究会参加者、とりわけ「若手研究者」が現場で得た感覚や経験からの言葉を大切にすることである。マスター／ドクター／研究員がそれぞれのコネクションを活かしつつ、データセッション、読書会、研究交流を進める。それにより知識や実践の集積としてのフィールドワークの「技法」を問いなおしていくことが、本研究会のゆるやかな方向性に他ならない。

##### 2 第1回研究会の開催主旨

上記の方向性を踏まえつつ、2017年1月20日(金)、関西学院大学社会学部共同学習室に

1) 本研究会の発足にあたり、本研究科の伊藤康貴さん(奨励研究員)、山岸蒼太さん、松野靖子さん(いずれも博士課程前期課程)にも意見を頂いた。

て「フィールドワークと映像をめぐるデータセッション」を開催した。その詳しい経緯と内容は、次節の話題提供者（飯塚諒）とコメンテータ（ケイン樹里安）からのレポートを参考頂くとして、以下では簡単に公開研究会の案内として提示した概要を示しておきたい。

\* \* \*

近年の技術発達に伴い、フィールド調査を行う際のデータ収集の方法もビデオなどの映像機器が用いられる機会が多くなり、聴覚・視覚的な情報分析の必要性が増してきていると言われる。例えば、非言語的な情報を扱う場合も、写真や DVD を用いた映像・視覚的資料が用いられることで、書記のみでは難しい情報の伝達・収集が可能となってきている。だが、そうして手元に残る映像データの内容や、そもそも映像を分析することの意味や技法が求められる背景を、どのように考えればよいのかについて、意外と話し合われる場は少ないように思われる。

上の議論をはじめるにあたり、今回の研究会では、研究会メンバーの具体的なデータに基づいたデータセッションという形式をとることで、当該テーマについての問題点を明らかにすることが目指される。まず、聴覚障害者への支援のフィールドワークに関わる飯塚諒氏から、聴覚障害者（難聴者）と聴者のあいだで通訳を介した飲み会場面についてのデータを提示いただく。次いで、ゲストのケイン樹里安氏より、映像へのコメントをはじめ、映像をはじめとするデジタルデータを社会的／メディア論的に分析することの意味と課題についてコメント頂きながら、議論を進めていく。

この2名による問題提起から、映像データを分析にどう活かしていくのかという技法的な課題のみならず、そこで何が得られ、何が限界となるのかという構造的な課題にも目を向け、フィールドワークと映像データを取り巻く、「今」を検討していきたい。

### 3 研究会を終えて：話題提供者とコメンテータから

#### 3.1 話題提供者の観点から（飯塚諒）

2015 年 5 月頃に撮影した、聴覚障害者の通訳者を介した飲み会の場面のビデオデータがあった。通訳者と聴覚障害者（難聴者）と対話相手の聴者が 2 人、計 4 人をそれぞれ撮影したものである。私が博士課程に進学する際に、「視覚的な情報のやり取りの相互行為をみたいのならば、ビデオを使うなどすればいいのでは」という意見を先生方から頂き、ちょうどその頃、聴者と交流がしたいという難聴者の知人がいたので、依頼・セッティングをして撮影した経緯がある。当時私は、「日本語対応手話の通訳者を介することでどのようなコンフリクトがあるんだろう…」と思っていたのだが、撮影物（データ）はやりとりが意外なほどスムーズにされていて、私の問題関心にダイレクトに該当するものではなかった。そのため、“お蔵入り”していた。

稲津さんとたまたま院生室で話していたとき、そのデータを検討できれば面白いのではないかと話があった。そして、彼の知り合いで、フォト・エスノグラフィという領域で活躍するケイン樹里安さんをお招きし、研究会を開催することになった。

研究会を通して、このビデオに関していくつかの視座がみつかった。当時私は、スムーズなやり取りだなと思って見ていたのだが、“スムーズすぎるおかしさがある”という指摘があった。例えば、やり取りが「質問」と「返答」の繰り返して特に“盛り上がり”がない。それはいわゆる実験室的（セッティングもマッチングも恣意的）な空間であったのとは他に（同時に）、参加者がそれぞれの役割の遂行を徹底している、という見方ができるのではないか。参加者が脱線しないように会話をすすめていく（スムーズであろうとする）が故に、ビデオに映ることがない周りの物に視線をやったり、周りの騒がしい音に会話が遮られたとしても、特にそれに言及することしない。あえて“見えないもの・触れないもの”として振る舞っているが、それにこそ意味があるのではないか。つまり、目に見えるものだけではなく、ビデオデータと同時にフレームに収まらない連続的な“外”にも注目していく必要があるのではないかという想像力である。

加えて、ケインさんのよさこいのフィールドでも共有する部分があった。“よさこい祭り”という連続的な人々の営みを、写真をつかって空間と時間に区切りをつけていく、伝えるためには、そこにはなにかしらの“捨てる”という行為が必要だが、捨てられた・写らない（人々の関係など）の意味を問うことも同時に必要になってくると思う。これが“見えないもの”である。

また調査者の立場として、ケインさんのよさこいのフィールドでは「写真を撮る」という行為がなかなか難しい。もともと調査者（ケイン）は外部の人間がフィールドに入るという感じではなく、もともとフィールドにいて調査をはじめたという形式をとっている。しかし、そのような場合においても、自分の立ち位置をどうするかという課題があり、例えばカメラをむけたらピースをされる（関係性があらわれる）、カメラをもっていたら、お祭りが冷めてしまう（参加者としての役割）というようなことがある。私もビデオを撮った際に、飲み会の場にはほぼ席を外していたのだが、会話が私の内容になったりと、自らを切り離せない部分はどうしてもでてきてしまう。“調査者や参加者としての私”を包括して捉え、見えないことへの意味を問う、そのような研究会となった。

### 3.2 コメンテータの観点から（ケイン樹里安）

「フィールドワークの技法を問う」と題された研究会に、コメンテータとして呼び頂いた。私は2014年からビジュアル調査の1つの方法であるフォト・エスノグラフィを用いて研究を進めてきた。文字通り、フィールドで撮影した写真を手がかりに議論を展開する方法論がフォト・エスノグラフィである。一方、飯塚さんは長回しで動画を撮影するアプローチを取ってこられたという。静止画と動画、そして問題関心はそれぞれだが、両者とも映像社会学的な研究実践に取り組んできた。映像社会学的な研究交流が関西で開催され、参加者のみなさんと多くの意見を気がねなく交わせたことは大変刺激的だった。

さて、研究会では、まず、飯塚さんの映像作品を鑑賞するところから始められた。調査者がセッティングした、いわゆる「実験室状況」における4名の調査協力者のやりとりを4台のカ

メラで撮影した映像を、時折、調査者（報告者である飯塚さん）による解説や質疑、軽いディスカッションを挟みつつ、30分ほど見せていただいた。

飯塚さんの映像資料は非常に興味深いものであった。なぜなら、調査者がフィールドにできるだけ介入せずに「自然なやりとり」を撮影しようと試みたにも関わらず、映像には調査者が残した「痕跡」が映し出され続けていたからである。

「痕跡」とは、時折、調査者自身が意図せずにフレーム内に姿を現してしまうということや、たびたび調査協力者たちが調査者について言及することにとどまらない。なによりも、調査協力者たちが快活かつ円滑なコミュニケーションを構築・維持しようとして、どこか薄水を踏むようなぎこちなさを感じさせるような立ち振舞いそのものだ。なぜなら、彼ら・彼女らが自身が置かれた「実験室状況」を破綻させないように極めて繊細な気配りや立ち振舞いをみせるたびに、その状況をセッティングした調査者の姿勢やアプローチ、さらには解釈の妥当性に至るまで、鑑賞者は思考をめぐらせざるをえないからだ。わたしたちは映し出された映像を見る行為を通じて、調査者の「痕跡」と直面し続けていたのである。

調査者は、調査者である前に、あるいは、調査者であると同時に、そもそもフィールドの「参与者」にはほかならないのだ。飯塚さんの映像はフィールドにおける調査者の身体の痕跡を鮮やかに映し出しているように思われた。

実は、この「参与者」としての調査者というアイディアは、私自身がフォト・エスノグラフィの実践に取り組むなかで、痛感し続けてきたことでもあった。私がカメラを向け続けてきた人々は、ともによさこい踊りという文化の担い手だったからである。私は参与観察の主流である「文化の担い手になるアプローチ」と対になる「文化の担い手であるアプローチ」なるものを指摘したことがあったが、これは、すでにフィールドの参与者であり、現代文化の担い手である自分自身の「痕跡」がビジュアル調査によって視覚化された経験に基づいていたのであった。調査者の「痕跡」こそ、ビジュアル調査の可能性や課題を考える手がかりであるように思われてならない。

さて、司会の稲津さんが指摘されたフィールドの「外部」に着目する必要性について、飯塚さんは「外への想像力」と形容されていた。これらの指摘を踏まえたくえて、私が感受したことを最後に述べたい。

私たちの課題は、たしかに「外への想像力」を鍛えておくことである。そこに異論はない。だが、私たちは同時に、映し出した豊穡な社会風景から論じるべき対象を切り出すための、切り口や視点、論じかたといった点に、あまりにも多くの課題を抱えているように思われる。膨大な情報量をもつビジュアル資料をどのようにすれば論拠として活用しうるのであるのか。このような実践的課題に應えていくなかで、蓄積されていくものこそが、社会学者レス・バックのいう「技能 (craft)」であり、それが可能にする「耳を傾ける技術 (art of listening)」であろう (Back 2007=2014)。「外への想像力」を鍛えながら、技能や技術を身につけていくこと。これらがわたしたちの前にある課題であることを本研究会は刺激的に知らしめてくれた。

次回以降に、もし再びビジュアル調査をテーマとしたデータセッションが開催されるのであ



写真 1 第 1 回研究会の様子

れば、次は「明らかになったこと」までを議論の射程に含めて論じ合えることを「楽しいな課題」としたい。なぜなら、何かを明らかにしえてこそ、「フィールドワークの技法を問う」プロジェクトはより展開しえるように思われるからだ。

【参考文献】

Back, Les, 2007, *The Art of Listening*, London : Berg, (=2014, 有元健訳『耳を傾ける技術』せりか書房).